

庄・胃粘膜血流量・PGの変動の強い、ET投与60分後までの各臓器におけるETの局在について酵素抗体法で検討した。

〔方法〕ET投与前、5分、30分、60分後の胃・その他の臓器を摘出し、10%ホルマリン固定後、パラフィン包埋し切片を作製、ABC法・間接法で免疫染色し、DABで発色、ヘマトキシリンで核染色をし、顕微鏡で観察した。

〔結果〕胃については、ET投与前後で染色分布に著変はなく、胃底腺の中下部の腺細胞>筋層>粘膜筋板の順に、血管壁は、漿膜下>粘膜下層>粘膜筋板付近の順に強い染色性を示した。その他の臓器については、ET投与前後で染色濃度と部位に変化がみられ、文献での autoradiography によるET局在とはほぼ一致していた。

34. 十二指腸狭窄を来した慢性膵炎の2例

(内田胃腸科外科病院)

桂川 秀雄・内田 泰彦・重松 恭祐・吉井 克己・佐上 俊和・田中 穰

症例は、60歳の男性と64歳の女性で両者とも飲酒歴豊富、嘔吐を主訴に来院。上部消化管精査にて十二指腸良性狭窄と診断されたが、予後および悪性疾患の完全否定が困難なため膵頭十二指腸切除を行なった。切除標本の病理学的検索において、慢性膵炎に伴う十二指腸粘膜下の膿瘍および十二指腸漿膜下の嚢胞の急性炎症による、十二指腸の急性炎症性狭窄であった。

35. 大腸癌症例における血清ラミニン値の検討

(東京女子医大第二外科)

泉 公成・亀岡 信悟・斎藤 登・中島 清隆・板橋 道朗・浜野 恭一

ラミニンは基底膜に存在する糖蛋白で癌の浸潤、転移に関与すると言われている。今回、大腸癌症例125例(肝転移例24例、非肝転移例101例)の血清ラミニン値(以下:LN)をRIAにて測定、検討した。

〔結果〕壁深達度pm以下のLNはss, a1以上の症例より有意に低く、静脈侵襲では、侵襲の程度と相関を認めた。リンパ管侵襲の有無では有意差を認めなかったが、侵襲程度とは相関せず、LNはv因子とより相関すると思われた。v(+)例は自験例でも有意に高率に肝転移を認めており、LNはこの点で肝転移との関係が示唆された。そこで肝転移との関係をみると、H(+)症例のLNは、H(-)より有意に高値であった。即ち、LNは大腸癌肝転移予知因子として、今後期待できるものであると思われた。

36. 直腸癌手術術式による術後性機能、排尿機能障害の差について

(東京都立駒込病院外科)

山本 雅一・森 武生・高橋 孝

直腸癌手術症例にアンケート調査を施行し、術式別に術後の性機能、排尿機能について検討を加えた。対象は1984年から1989年までに都立駒込病院にて手術された直腸癌48例である。自律神経非温存例では致命的な排尿障害(カテーテル留置、排尿困難、尿意喪失など)が50%と多く、片側温存では8%、両側温存では0%と軽快した。男性の性機能では非温存では勃起、射精障害が83%と多く、片側温存では42%、両側温存では14%と軽快した。性生活への意欲は、神経温存以外に、人工肛門の有無、性差なども関与した。

直腸癌術後のQOL向上に自律神経温存術の貢献は大きいと考えられ、手術の適応、術後の早期確立が望まれる。

37. クロウン病手術症例の術後経過

(聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院外科、

*同病理、**川崎胃腸病院)

関澤 裕人・生沢 啓芳・田中 一郎・水野 弘・大越 修・金杉 和男・片場 嘉明・品川 俊*、松尾 成久**

術後経過観察中のクロウン病症例7例について術前、手術、術後に分けその臨床経過および治療を比較検討したので報告した。

対象は1978~1990年までに手術を施行した男性5例、女性2例の7例で、手術時年齢は24~59歳、全例小腸型であった。術前にクロウン病と診断され治療されていたものは2例であった。手術適応は穿孔、狭窄、内瘻形成などで術式は主病変部の切除を原則とした。術後経過期間は9カ月~11年7カ月で、3年以上経過した症例は全例平均2年5カ月で再発した。術後再発症に対しては消化態あるいは半消化態栄養剤による栄養療法が有効で、全例再手術なく症状は安定し維持されている。

38. 胃癌を合併し、回盲弁より発生した巨大大腸脂肪腫の1例

(府中医王病院)

井上 達夫・島田 幸男・押淵 英晃・都築 康夫

症例は64歳女性、主訴は、右側腹部痛。右側腹部に腫瘤を触知し、注腸造影において上行結腸全体を占める辺縁明瞭な腫瘤を認め、大腸内視鏡において、回盲